

Social Coordination Letter



ごあいさつ

多様な経験を通じて「自分にできる」を探す旅

人とうまく関われない、コミュニケーションに苦手意識を持つ学生が増えている。それはなぜだろう。2020年以降コロナ禍の空白期間に、若者の対人関係性が低下したのだろうか。しかし、子ども時代から学校や家庭や地域で育まれるべき、人とのかかわりや遊び経験は不足してきた。

社会教育士は、人と人、人とまちをつなげる教育専門職である。将来、公務員や人と関わるヒューマンサービスなど漠然とした夢を描く学生がいる。しかし、夢と現実はずしも一致していない。対人関係を意図的に促し、多様な経験を重ねる訓練の場が必要だ。学校では、優れたカリキュラムや授業を整え、優れた教員や地域コーディネーター・事務の配置が求められる。学ぶ環境をさらに高めるには、地域の頼れる大人（行政、社協、ケアプラザ、自治会、NPO・ボランティア団体等）の協力が欠かせない。斜め関係の不思議な大人との出会いは、学生が動き出す勇気を与えてくれる。答えのないコミュニティ活動を通じて、「自分にできる」を探す旅に出る。

本紙は、1年間にわたって実践した、学生の多様な学びを記録したニュースレターである。常に、学生の目線に立ち、学生のやりたい気持ちに寄り添う、神奈川大学社会教育課程でありたいと思う。沢山の方々のご協力を頂き、心から感謝申し上げます。これからも、是非、学生の成長を引き出す機会を共に創っていきたい。引き続きのお力添えを、どうかよろしくお願いします。

神奈川大学社会教育課程での学び

人は生涯にわたり、成長し続けます。
人は地域に関わり、地域と共に成長します。

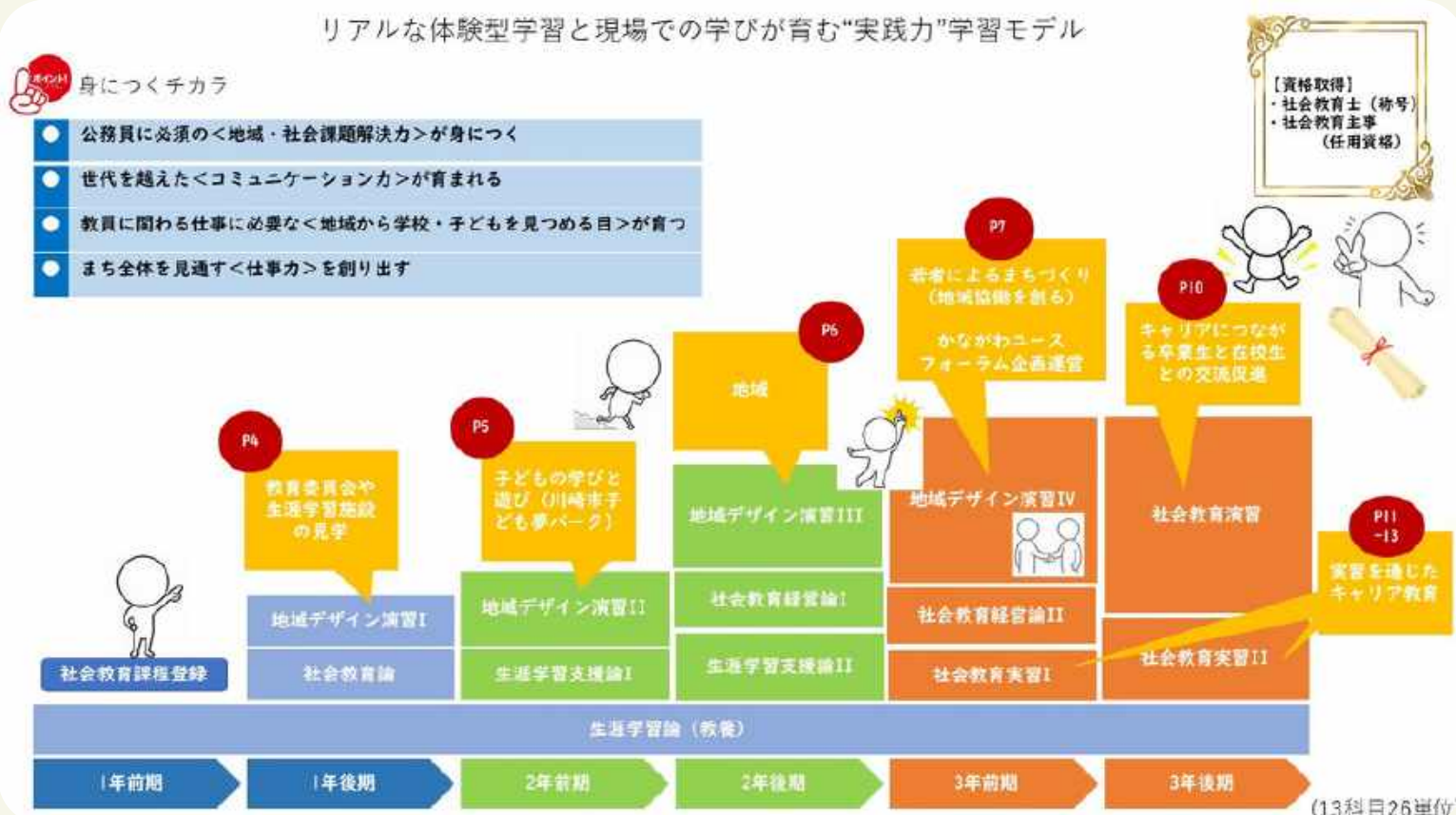
社会教育課程を通じて、

「学ぶことの楽しさ」を体得し、「自ら学びを創り出す」力を育みます。
学生たちには、次の5点を目指しています。

- (1) 生涯にわたり、人は成長し続ける
全ての人は本来もっている潜在能力があります。その力を最大限引き出し、卒業後もエンパワメントし続ける生涯学習によって、わたしの未来は拓かれます。
- (2) 学びのおもしろさを知る
これまでの受け身型学習から脱却し、学びのおもしろさや広がる新しい世界を経験しましょう。学びの場は、大学だけでなく、公民館、図書館、博物館、生涯学習センターなど地域にあらゆる拠点があります。
- (3) あらゆる経験を学びに変える
初めて知る、自分で考える、話し合う、新たに発見する、経験や体験を重ねていくことによって、知識を確かなものにしていくことができます。
- (4) 子ども・おとな・高齢者にかかわる
世代・文化・国を越えた老若男女のかかわり・交流を大切にしています。かかわった一人ひとりが元気になれば、「まち」（地域）も豊かになります。
- (5) 「学びのコーディネーター」を目指して
「まち」（地域）のもつ資源に光をあて、学びのしかけ人を目指します。公共（行政）と民間（企業、NPO/ボランティア）を巻き込み、おもしろいことを挑戦します。

神奈川大学社会教育課程では、「現場で学び、実践力を養う」ことを目的に、「地域デザイン演習Ⅰ～Ⅳ」及び「社会教育実習Ⅰ・Ⅱ」などで学内外の様々な地域フィールドの活動に参加していきます。同課程では、生涯学習に関わる知識の獲得だけでなく、「地域・社会の課題解決力」「世代を超えた貢献できる力」「仕事を自ら創り出していく力」を育む教育に力を入れています。

リアルな体験型学習と現場での学びが育む“実践力”学習モデル



社会教育課程の学びをキャリアに活かす

～非常勤講師に聞く～



加藤 憲一
(社会教育経営論Ⅰ 担当)

2020年より、神奈川大学社会教育課程で「社会教育経営論」「地域デザイン演習」などの講義を担当させて頂いています。私は社会教育の専門家ではないですが、2008年から2020年までの三期十二年間にわたる小田原市長としての経験から、「社会教育」と「地域課題の解決」が密接な関係にあるとの実感から、市長として取り組んだ市政のリアルを通じて、学生たちに講義を行ってきました。

いま、日本の地方都市はとても難しい局面にあります。人口減少、少子高齢化、各種社会インフラや街の老朽化、地域コミュニティの弱体化、気候変動に伴う災害の多発、自然環境の劣化、公共部門の財政悪化などが、同時に押し寄せている訳ですが、こうした局面を乗り越えるには、根本的には最大の社会資本ともいえるべき「人の力」を高める、さらにはそれを核として「地域の課題解決力」を高めることが不可欠であると確信しています。

地域社会の課題に向き合い、それを「人の力」を高めながら克服していく実践プロセスは、私から見れば「最高の社会教育フィールド」です。そしてそれは、地域社会がどのような現実を抱えているか、その克服策として何が有効かを、学生がリアルに学ぶプロセスに他なりません。実際、私の講義では、自然環境、地域福祉、人づくり、地域経済、コミュニティなどの切り口を設定し、小田原市も含めた日本の地方都市における、「人の力」による地域課題解決の最前線の取り組みを紹介。その上で学生たちにも現場で市民のナマの声を拾い、ソリューションを考え発表する経験を重ねてもらいました。こうした学びと経験は、地方公務員としては勿論、民間での仕事においても極めて重要な「時代と社会の課題認識」と、その解決策に関する「基礎的能力」を修得することにつながります。

「社会教育」は、「一個人の豊かな人生」のためだけでなく、「より豊かで確かな社会の実現」に直接的に貢献するジャンルなのです。



秦野 玲子
(社会教育論 担当)

なりたいたいおとなはどんなおとな？そんな問いの答えを各自が考え、そこに「学びがどう関わるのか」をグループで考える、私の担当する社会教育論の授業のひとコマです。

なぜこのような演習をするかという「学び」は一人ひとりがより良く生きるために必要で、社会教育ではそのエネルギーを引き出し、他者と共有していくことが大切だからです。

そのため、理論や正解を丸暗記するのではなく、投げかけられたテーマについて、自分の考えをわかりやすく表現し、お互いの意見や考えを聴き合い学びあうグループワークと、ふりかえりを重ね改めて課題を整理し、次に自分を取り組むべきことを自分で考え、他者に働きかけ、ともに実現させる力を授業の中で磨きをかけることを目指しています。

それは、行政の仕事に限らず、学校でもZPDでもフリーランスで働く場合でも求められる「与えられた役割の中で何にどう取り組むかを自分で決めて実行できる力」や「自律的な思考」「グループ内での協調性だけでなく、多様な人々と繋がり協働を生み出す力」をつけることにつながっているからです。

社会教育論に限らず社会教育課程には、様々な演習型授業をとおして、皆さんが社会に出て、自らキャリアを切りひらいていく際に「あ、これが社会教育課程の授業で自分が身につけた力だ」と実感し、活かせることが沢山つまっていますよ。



倉岡 正高
(生涯学習支援論Ⅱ 担当)

日本社会が直面する超高齢社会という傾向は、大学生の皆さんが社会人となり高齢者になる時点でも変わることはありません。この人口動態の変化は、あらゆる業種に影響をもたらすものであり、働き方も変わらざるをえないでしょう。また、高齢者だけでなく、様々な世代の中で社会的格差が生まれることが予想されます。社会教育課程のみならず、社会課題に関心が高く、そうした課題の解決を考える機会だけでなく、実践的に多様な世代や、社会的弱者に寄り添う経験もされたかと思っています。そうした共感する力は働く上でも大切にして頂きたいと思いますが、気持ちだけでは、仕事の成果は生まれません。

今年度生涯学習支援論Ⅱの授業において、地域課題のアセスメントから課題を設定し、その課題を解決するための取組をロジックモデルに沿って計画し、アウトカムを評価する方法を教えました。こうした知識と技術はどの職業分野においても求められると思いますし、お客さんや周りの人に共感できる力を持った、社会教育課程のみならずのよう那人こそ持つべき技術だと考えています。ぜひ、今後のキャリアの中でも授業で習得した知識と技術を活かして頂ければ幸いです。



横浜市三ツ沢公園青少年野外活動センター実習

開催日時：2024年4月27日（土）9：30～16：00

場 所：横浜市三ツ沢公園青少年野外活動センター（横浜市神奈川区）

参加人数：7名（1・2年生）

担当教員：磯田浩司非常勤講師（特定非営利活動法人Good代表）

○目的

実際に地域にある社会教育施設を自分たちで利用し社会教育施設の役割や機能などを知るとともに、学生同士の交流を行う。

○当日の様子

小雨交じりの天気の中、まだ2回しか顔をあわせていない7名の学生の自己紹介や全員の名前を覚えるゲームから実習がスタート。レクリエーションを通し徐々に緊張がほぐれ、お互いの距離を縮めていきました。午前のメインプログラムは三ツ沢公園の自然を活かしたポイントラリーです。3つのグループにわかれ、ポイントでのミッションをクリアしながら、動画撮影などにもチャレンジし、広大な公園敷地内を90分ほどかけて歩き回りました。ランチタイムに磯田先生お手製のカレーとからあげ、ポテトサラダをみんなでいただいた後、午後は対話の時間。大学生活について思うことなどをじっくり語り合いました。実習の終わりには、1日を振り返り、自分と向き合い考えたこと、同じ時間を過ごした仲間から学んだことなどの感想を書いたのち、みんなの前でシェアしました。

参加した学生からは「新しいことに挑戦することが大事だと学んだ」や「自分とは違う考え方や行動を見つけることができた」、「自分の新しい一面を知れた」などの発表がありました。



地域デザイン演習Ⅰ (MMC)

実践報告2024

よこはままち歩き

開催日時：2024年6月22日（土）12：30～17：00

場 所：横浜市関内・関外地区

参加人数：7名（1・2年生）

担当教員：高城芳之 非常勤講師（NPO法人アクションポート横浜代表理事）

○目的

実際に現場に行ってみることで、社会教育において活用できる知識と体験を得る。

○当日の様子

日本大通り駅を出発し神奈川県庁を見て、山下公園、横浜中華街を抜け、寿町地区へ。ここでは、寿町地区で横浜市と共同して事業運営を行う「横浜市ことぶき協働スペース」を訪問し、寿町の成り立ちや現状、ことぶき協働スペースが担っている事業について学びました。その後、昔の関所を通り、横浜市役所へ。市役所では、横浜市市民協働推進センターを訪れました。このセンターは、協働による社会課題解決に取り組む市民を支えています。最後は、横浜市ボランティアセンターを訪れ、横浜市のボランティアがあり、どのような発信をしているのかなどについて学びました。

○学生の感想

今回の実習では、普段自分からは足を踏み入れない地域や施設を見学して、今まで知らなかった横浜の姿や課題を知った。横浜市市民協働推進センターでは、主にnpo法人設立や運営に関することを自立的に実施できるようにサポートなどが行われていた。1年に約1000件の相談件数があり、数多くの方に利用されていた。現在、npo法人の理事長の方の高齢化が進んでいることが課題であると仰っていた。自分が住んでいる地域をより良くしたいという気持ちから設立されているので、活動を知ってもらって、継続していけるような策があると良いと思った。（経営学部2年 M.T）



場所：川崎市子ども夢パーク（神奈川県川崎市高津区下作延5丁目30-1）
担当教員：西野博之 非常勤講師（認定NPO法人フリースペースたまりば理事長）

○目的

多様な他者との出会い、リアルな体験活動を行うことによって、困難な課題に向き合える実践力を育む。様々な背景を抱える子どもたちとの直接的な関わりを通じて、子どもの気持ちの受け止め方を学び、子どもが発する「試し行動」に、どのように向き合い、コミュニケーションを図っていけるようになるかを学ぶ。

とことん あそぼうデイズ！

開催日時：2024年5月5日（日）
9：45～17：30
参加人数：13名（2・3年生）

○当日の様子

川崎市子ども夢パークのGWのイベント「とことん あそぼうデイズ！」の「あそぼうパン」企画に参加し、西野博之講師の指導のもと、子どもたちとの関わり方や、子どもたちが「やってみたい」ことに挑戦できる遊び場にするための運営方法について学びました。

○学生の感想

私自身、小さい頃は習い事ばかりでほとんど遊んだことがなく、当時はそれでも充分だと思っていました。しかし今回の活動で、本当の遊びを感じられました。縛られることなく、存分に気になること、やりたいことをするのは、我儘ではなく、成長のために必要なことなのだと思います。

（人間科学部2年 M.S）



夢パまっりの準備実習

開催日時：2024年7月14日（日）
9：30～17：30
参加人数：20名（2・3年生）

○当日の様子

次の日に行われる「夢パまつり」のための前日準備を行いました。どのように準備をしたら安全に遊べるのか、円滑なイベント運営ができるのか、夢パークのスタッフの動きや言葉に注意しながら、パーク内を整備しました。

○学生の感想

子どもならではの発想力、子どもが安全にのびのびと過ごすために大人ができること、リスクとハザードの違いを見分けることの難しさを感じた。

子どもの発想力を感じた場面は、看板に火山のイラスト描く作業の時である。子ども達と一緒に看板に火山のイラストを描いた時、大学生の私たちは、火山のイラストを調べながら失敗しないように恐る恐る描いていたが、一緒に描いていた子どもたちは、絵具を使ってのびのびと描いていた。子どもの頃は、自由に楽しめていたことに対し、大人になるにつれ、失敗してはいけないという気持ちが強くなることを実感した。（人間科学部3年 M.A）



こどもゆめ横丁実習

開催日時：2024年11月3日（日）10：00～18：00
11月4日（月）8：40～18：00
参加人数：3日2名/4日12名（2・3年生）

○当日の様子

子どもたちが自分たちで出店内容を考え、お店を建て、商売までやってしまう「こどもゆめ横丁」にて実習を行いました。3日は本番のための準備、4日は受付、自転車置き場、ボランティアセンター、プレイパーク運営の3班に分かれ、スタッフの動きを学びました。休憩時間やフリータイムには、子どもたちのお店を回ったり、プレイパークで子どもたちと遊んだりしました。お店が閉店した15時から、子どもたちの納税作業と解体作業を手伝いました。最後に、一日の振り返りをして解散しました。

○学生の感想

2日間を振り返って、大人（スタッフ）の役割とは子どもたちとご家族が安心して過ごせ、やりたいことをのびのびとできる環境をつくることだと思いました。子どもたちが困ったときに頼れて、子どもたちが安全に遊べる環境を作り（釘や穴など）、ときには一緒に遊ぶ。大人とは、子どもたちに自分の考えを押し付け、思い通りにする道具ではなく、子どもたちの成長を見守り、一緒に成長していくことだと思います。あくまで子どもたち主動。子どもたちの興味関心をサポートすることが大切な大人の役割であると感じました。（経営学部2年 K.M）



実践報告2024

地域デザイン演習III (YC) 地域の課題を考える



日時：2024年10月30日（水）
15：40～17：00

場所：横浜市六角橋地域ケアプラザ

参加人数：21名（2・3年）

担当教員：高井正 非常勤講師

連携協力：地域交流コーディネーター 安信昌子氏
地域包括支援センター社会福祉士 小暮孝行氏

○目的

- ・大学の近隣に六角橋地域ケアプラザがあることを知る
- ・どんな取り組みをどのように実施しているかを知る
- ・働いている職員/スタッフの皆様の想いに触れる
- ・自身のキャリア形成の参考とする

○学生の感想

「地域ケアプラザ」という施設が横浜にしかないものであるということに驚きました。地域包括センターは各自治体にあります。それに加えデイサービスや居宅介護、地域交流なども行っていることが分かりました。特に高齢者となるとSNSでの検索が十分にできないことが考えられるため、何か困りごとがあったときにどの施設を頼りにすればいいのかというのが一か所にまとまっている横浜市の体制は非常に市民に寄り添っていると感じました。

地域の課題を考えました！

六角橋商店街の活性化

〈課題・疑問点〉

シャッター商店街
地域交流の場の減少
商店街の活気がない

〈訪問先〉

六角橋商店街
野村浩氏・石原孝一氏



地域の防災

〈課題・疑問点〉

災害発生の多さ
災害を未然に防ぐために大学
がどのような防災対策を行っ
ているか

〈訪問先〉

神奈川大学総務部危機管理課



子どもの居場所づくり

〈課題・疑問点〉

体験格差
居場所の減少
身近な居場所はないのか？

〈訪問先〉

ふれあいっこ三ツ沢
小川真奈美氏



伝統的な祭りを考える

〈課題・疑問点〉

子供会の減少
子どもが楽しめるお祭りを続け
るには？

〈訪問先〉

杉山大神総代会
森勤氏



実践報告2024

～地域の課題を考える～ プレゼン大会



○目的

学生自ら考えた地域課題について、地域の方にインタビューした結果を踏まえ、自分たちなりの解決策を考える。その結果をプレゼンする。

日時：2025年1月8日（水）

15：40～17：00

場所：神奈川大学3号館

参加人数：21名（2・3年生）

担当教員：高井正 非常勤講師



○学生の感想

今回初めて企画や訪問をしてみて、私たちから見えている世界と当事者の世界は違うということに気づきました。一見するとデメリットだと感じる部分があっても、様々な工夫を重ねれば強みにもなることを知って、一つの出来事でも様々な捉え方ができるということを学びました。今回の学びをこれからの活動に生かし、視野を広げていきたいです。（人間科学部2年 Y.N）

開催日時：2024年7月13日（土） 13：00～16：30

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 3号館3階

参加人数：運営30名（3年21名・4年5名・大人4名）

参加者330名 計360名

担当教員：齊藤ゆか 人間科学部教授、寺嶋正尚 経済学部教授



コンセプト

「育てよう・未来への種」

（想い：先輩たちが蒔いた、つながりを種に見立て、より強くする、育てたい）

目的

- ①課題へチャレンジ（企画・運営・実施）を通じて、「実践的能力」を育成する。
- ②地域社会との交流推進：新型コロナウイルスの影響により失われた、地域における体験・挑戦の機会（地域参画）や、世代を超えた交流、新たな人との出会いやつながりづくりの機会創出を行う。
- ③潜在層への支援：潜在的な学生ボランティア層に向けて、「地域の未来に何ができるのか」、社会課題・地域課題の解決に向けたテーマに対して、学生同士が考え、議論し、提案する機会の設定を行う。

協力

〈神奈川大学〉

社会教育課程学生有志

JYSP事務局・学生ボランティア活動支援室

KU GOOD COFFEE CLUB 神奈川大学珈琲同好会

〈行政・学校〉

横浜市・神奈川区・小田原市

戸塚警察署・神奈川県立青少年センター

横浜市立東高等学校・捜真女学校高等学部

産業能率大学(武内千草ゼミ)・近隣中学校

実施主体

社会教育課程「地域デザイン演習Ⅳ」履修者
（かながわユースフォーラム実行委員）

○学生代表：高梨瑛士（経済学部3年）

副代表：酒井夢宙（経済学部3年）

藤田悠菜（人間科学部3年）

〈民間〉

神奈川区社会福祉協議会

神奈川区内横浜市地域ケアプラザ(六角橋・沢渡三ツ沢)

神奈川区多文化共生ラウンジ

神奈川区斎藤分南部町内会

神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ・友ゆうスペース

たんぼぼプロジェクト六角橋チーム・すくすくかめっ子

ふれあいっこ三ツ沢

川崎市子ども夢パーク・NPO法人good!

NPO法人アクションポート・横浜あおばコミュニティ・テラス

東京ヒューマンライブラリー協会

プログラム1【全体会】

7つの分科会とパネル展示に分かれる前のイントロダクションを行うとともに、参加者がそれぞれ興味ある分科会の「旅」から戻った後のリフレクションを行いました。



2020年度から年に1回実施。2024年度は5回目。

STEP 1：地域課題の洗い出し・班分け（1～4月）

STEP 2：地域課題の共有（5月上旬）

STEP 3：若者ができる地域実践＝具体的なプロジェクトを探る（5月下旬）

STEP 4：プロジェクトの実行（6～7月）

STEP 5：プロジェクトの実践内容と成果をユースフォーラムで分科会として報告するとともに、次年度に向けて反省点などを共有（7月13日）

STEP 6：継続して地域と関わっていく（7月～）

プログラム2【分科会】

1. ミライを語ろう！子育て会議！

1・3クールでは子育てやその支援に関わっている方々からお話を聞く『ヒューマンライブラリー』、2クール目では「どんな子育て支援があったらいいか」を考えるゲームを実施することで、学生にとって子育てが身近なものとなる機会とした。



4. 色と制服に性別はある？

多様性が尊重される時代に、学校の中でジェンダーレスの制服やランドセルが普及してきている。そこで、ジェンダーに関する価値観を自分の経験と結びつきながらディスカッションを通じて考えてもらう機会にした。



7. 町内会と地域防災について考える



大学生と町内会が共同し、町内を歩きスタンプラリーをしながら、消火栓などの地域に設置されている防災器具などを周り、防災について理解を深める「防災スタンプラリー」を実施した。分科会当日は発表とグループワークを通じて学生が防災について考える場を作った。

2. 国境を越えて輪を広げよう！



外国にルーツのある子どもたちが、国籍や年齢の垣根を越えて楽しむことのできる交流会を地域の施設に向けて企画・運営をした。その活動を通して知った外国ルーツの子どもたちが抱える問題や、子どもたちを支える地域の方々の声や学生に求められることを学ぶ分科会を実施した。

5. 一歩踏み出して、知らない世界を見に行こう！



宿泊型ボランティアである「ワークキャンプ」を通して世界中で活動を行っているNPO法人。英語が苦手な人や初海外の人でも参加ができる活動であることを、実際に活動を行っていた学生からの話や交流を通し、ワークキャンプの魅力を伝える分科会を実施した。

3. オレオレ詐欺を一掃せよ！

オレオレ詐欺撲滅に向けて、若者にできることを考える場を提供した。また、議論を通して、オレオレ詐欺から自身の身を守る方法など、実践的な内容を学ぶ機会にした。



6. 大学生と中学生をつなぐ 学校ボランティア

教職課程を履修している学生が大学内で実施している「JIN-KANA学習塾」の紹介と、グループワークを通して、子ども達へ向けた学習ボランティアについて参加者が学ぶことができる分科会を実施した。



プログラム3【パネル展&ブース】

参加テーマ

- ・ 高校生とSDGs
- ・ 住みたいまち住み続けたいまち神奈川区
- ・ 青少年の活動って？
- ・ サステナブル研究部ってなに？
- ・ 向き不向きよりも前に！準備で変わるボランティア体験
- ・ 自分らしくいれる子どもの遊び場
- ・ コーヒーを通じた活動
- ・ 大学生応援プロジェクト
- ・ 食と農の学び
- ・ 読書を促進するには
- ・ 横浜まち歩き
- ・ 学生ボランティア支援
- ・ ボランティア支援室
- ・ NPOインターンシップ
- ・ アクションポート横浜



小田原の森へ、木の生産現場を訪ねる

開催日時：2024年11月9日（土）10：30～16：00

場 所：小田原市いこいの森

（〒250-0055 神奈川県小田原市久野4294-1）

参加人数：8名（2・3年生）

担当教員：加藤憲一 非常勤講師（小田原市長）・齊藤ゆか（人間科学部教授）

連携協力：小田原市農政課、小田原市森林組合

○目的

行政・民間（地域団体等）と協働して、「テーマ」に基づく地域・社会課題を実践的に学び、市民向けに開発されたプログラムを体験する。

○当日の様子

午前中は、小田原市市長の加藤憲一先生より、100年先を考えた「森の豊かさ」を持続的に守り続けるために、「森全体の価値を総合的に高める」の取り組みについてご講義頂きました。特に小田原市の「森」の地域ブランド力を高める自治体の戦略を学び、学生同士で意見交換し合いました。

午後は、小田原市森林組合の佐藤健氏より、五感を活かした森歩きをしながら、木の生産現場を体験的に学びました。災害や地域経済だけでなく、教育的な観点から、日常的に森に関わる大切さを学びました。

○学生の感想

落ちていた葉っぱを探したり、木の実や枝を食べたり、今までやったことがない体験ばかりで、五感使って楽しめました。（経営学部2年 M.H）

地方出身の私にとって森林は身近でしたが、今は遠ざかっています。森林は、私たちの生活を彩ってくれるものだ改めて実感しました。（人間科学部3年 M.N）

地球温暖化対策や、小田原で育った木材をどう扱うか、難しい課題を知りました。

（国際日本学部2年 T.T）



実践報告2024

社会教育演習 (YC)

学生が考える「社会教育士」の力量とは？

開催日時：2024年10月8日・15日・22日 火曜日・1限

場 所：横浜キャンパス 20号館

参加人数：21名（3・4年生）

担当教員：齊藤 ゆか 人間科学部教授

○目的

それぞれが社会教育課程で身につけた力を振り返る。

○実施手順

- ① 全体で共通のテーマ設定。各自が必要とされる人材として必要だと感じる『能力カード』を20個記入（具体的であればよりよい）
- ② 個人の『能力カード』を紹介しながら、グループ内で近しいものを分野別に分類例）人に能動的に/受動的に関わる
- ③ 分野内で『能力カード』を重要度ごと（A／B／C）で仕分ける
- ④ 自分たちで定めたテーマに対して、より重要度の高い分野順に並べる

○学生の感想

・自分たちが職業として経験して得たものではないため、抽象的な意見が多くなってしまい分類化するのも一苦労だった。

・どのような能力が求められているかを客観的に捉えられなかった。

・他グループの行ったクドバスを見ることで、考え方の違いから新たに学ぶことが多いと感じた。

・実際の現場を知らないため、本当に必要なかわからない。



第1弾 ～先輩に聞く～

日時：11月12日・19日 火曜日・1限
場所：横浜キャンパス 20号館
企画運営：3年 9名
ゲストスピーカー：4年 7名
○内容

4年生の先輩方をゲストスピーカーとして迎え、一人の先輩につき5～6人のグループを作り、座談会形式で行いました。20分×4クールでローテーションを組み、全員の先輩方のお話を聞くことができるように構成しました。就職活動を始めたばかりの3年生に向けて、工夫した点や力を入れたこと、(公務員に内定した先輩方からはモチベーションの保ち方や勉強法などについて、) アドバイスをいただきました。

企画者側からの視点

私たちは、進路をきめて就活を終えた4年生から就活に関しての話を聞き、不安を抱えこれから進路実現に向けて進んでいく3年生の不安を解消し、先輩の経験を活かすことを目的として、今回の就活ライブラリーを開催しました。今回の就活ライブラリーの企画で工夫した点は、誰にお願いするかと時間配分、初日の座談会方式を採用したという点です。企画をたてて行く中で難しかったのは、どの先輩をお呼びするのかという事と、時間配分を考える事でした。公務員に内定した人、企業に内定した人の人数比をどうするか、その上で誰にお願いするのかという事は最初の課題でした。しかし、今回は誰がどのような進路に進んだのかはこれまでの繋がりで知っていた部分と、先生から教えていただいた為、その点はあまり苦労なく進めることができました。(法学部3年 O.K)



企画者側からの視点

緊張や不安もある中、企画メンバー一同、講演が無事成功し安心しました。一方でいくつか反省点も挙がりました。「グループワークの時間がもう少しあったも良かった」「質問者を匿名にしなくても良かったのかも」「休憩を入れるタイミングが良かった」「slidoを活用して質問が見える化でいたことで、回答しやすさがあった」これらの反省点はいつか私たちがイベントや企画をするときの参考にしたいと思います。イベントの企画をすることはチームの連携が重要であり、イベント当日まではいかに計画性を持って動けるかが、イベント当日はいかに臨機応変に動けるかが肝となってくると感じます。今回学んだ経験が次のイベントや講座へとつながっていければと思います。(国際日本学部4年 I.C)

第2弾 ～企業で働く社会教育士に聞く～

日時：12月3日 火曜日・1限
場所：横浜キャンパス 20号館
企画運営：3・4年 4名
ゲストスピーカー：石田智彦氏(日本青年館)・志田千帆氏(NPO法人マナビエル)

○内容
石田さんの自己紹介とともに社会教育に必要な考え方などを共有から始まりました。その後、「あなたが日常生活において社会教育だと思った瞬間は？」という問いが投げかけられ、参加者は4人1組になって10分程度各々が考える社会教育だと感じた瞬間を共有し、全体で意見交換をしました。休憩後、石田さんとファシリテーターの対談。事前に用意していた質問を軸に話を展開していきました。最後に、spの場で参加者の質問を受けられるslidoを使った質疑応答を行いました。



企画者側からの視点

白さんの行動力や持ち前の明るさ、笑顔、困難があっても立ち向かう強さなどが印象に残った学生が多く、みんなの気持ちを前向きにすることができた講座になったと思います！今回の講座を企画・運営してみてもの反省点は、元々考えていた内容が盛りだくさんで時間内に全てをやりきることができず、対面での質疑応答や感想の時間を十分に取ることができませんでした。しかし、残りの時間を見ながらそれぞれが臨機応変に対応し、講座自体は時間内に終了させることができたので良かったと思います。他にも、授業時間以外で話し合いを行ったり、連絡を取り合ったり、良いチームワークで講座を企画することができました。何より、みんなの笑顔をたくさん引き出した講座を作り上げることができて嬉しかったです！(人間科学部3年 M.N)



第3弾 ～ワークとライフ両キャリアの両立～

日時：12月10日 火曜日・1限
場所：横浜キャンパス 20号館
企画運営：3年 6名
ゲストスピーカー：佐々木聖壘(白聖壘)氏(神奈川大学卒業生・横浜市役所勤務)

○内容
講座では、まず白さんが日本に来て直面した困難や日本語を学ぼうと決心した出来事などをお話していただき、横浜市役所のことや公務員になろうと思ったきっかけ、公務員になってからのお仕事内容などワークキャリアについてお聞きしました。その後ライフキャリアである白さんが行っている多文化共生のための活動のお話をお聞きし、グループワークを行いました。そこでは、外国につながる子どもたちが抱える多くの課題についても知ることができました。



受講者：28名（社会教育課程3年生）

担当教員：齊藤 ゆか（人間科学部教授）・瀬沼 頼子（非常勤講師）

○目的

- ・現場の体験を通して、社会教育の専門職員として必要な「専門知識」「社会教育計画」のあり方、および「関連知識」の理解を深める。
- ・地域における社会教育活動に対して、社会教員の専門職員がどのように対応するのか、その学習援助のシステムや方法を理解する。
- ・市民の学習活動を支援する関連分野の指導者との連携のあり方、およびその具体的な内容を理解する。

○社会教育実習先のパターン

Aパターン：都道府県・市町村の教育委員会、自治体における生涯学習施設等

Bパターン：国立青少年教育振興機構の全国の青少年教育施設

Cパターン：その他 各種青少年教育団体（民間団体等を含む）生涯学習施設（公設公営、公設民営等）

○社会教育実習の流れ

「社会教育実習Ⅰ（前期）」は、実習先の自己開拓から始まる。実習先決定後、事前学習として地域の概要や社会教育実習施設の特徴や特色ある事業などについての調べ学習に取り組みながら、実習先担当者と連絡を取り合い、実習日程や内容の詳細をつめていく。

実際の現場実習は、8月から11月までの間、一人あたり40時間以上（5日間から10日間程度）行う。その間、各自で1日の活動記録や振り返りの日誌をつける。

【実習中の課題】

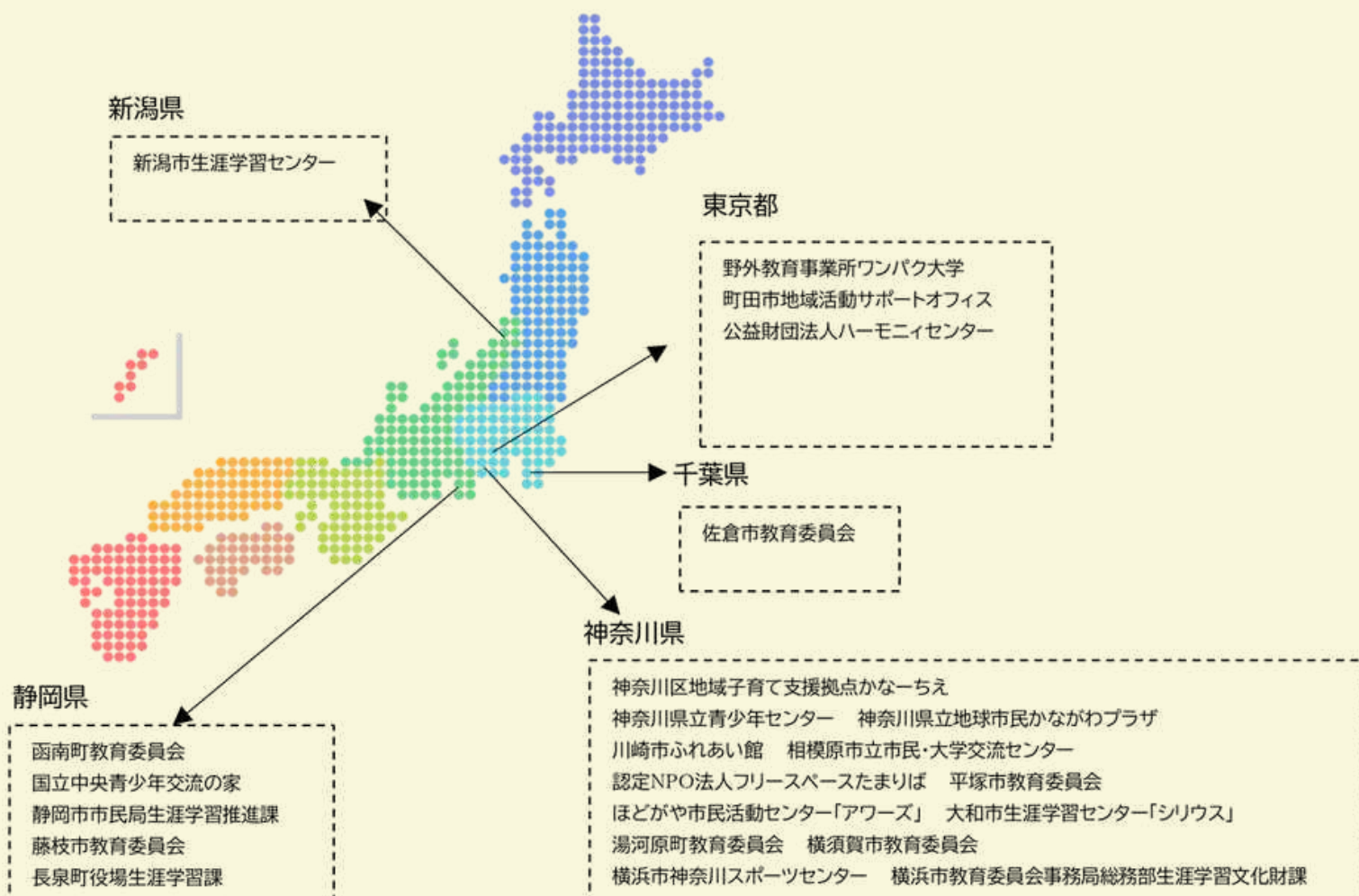
- ・社会教育施設・機関における学習者(利用者)に関する理解を深め、利用者の学習要求や当面する課題について理解する。
- ・社会教育施設・機関の役割・機能を学ぶとともに、他の学習機関との連携のあり方を学ぶ。
- ・社会教育主事の専門職としての基本的な資質について、実践を通じて学ぶとともに、自己を客観的に見つめる機会とする。

「社会教育実習Ⅱ（後期）」は、実習後の事後学習として、実習での学びを振り返り資料にまとめて報告会で発表を行うほか、報告書の作成に取り組む。

1年間の授業の流れ



2024年度の社会教育実習先（実習先23カ所、実習生28名）



実習体験記2024

国立青少年教育振興機構

国立中央青少年交流の家
(静岡県御殿場市)



国立中央青少年交流の家
国際日本学部日本文化学科
中山 彩香

実習では、青少年教育事業として行われている「小田急電鉄連携事業 富士山麗体験プログラム」に、施設スタッフの一員として、法人ボランティアの方々と共に参加することができました。野外活動施設ならではの安全管理や火起こし、テント立てなど大学では絶対に学ぶことのできないことが経験できると考え、実習先を選びました。

今回の実習で学んだことは、子どもたちとの「斜めの関係作り」です。青少年教育施設がもつミッションの1つとして、学校とも家とも違う子どもたちの居場所作りが挙げられます。しかし、それを叶えるためには、施設で生活する短い時間の中で、子どもたちとの信頼関係を気付かなければなりません。慣れない環境下での実習は、大変なことも多くありましたが、「何でもやってやるぞ」という姿勢で臨むことを心がけると、子どもたちはそんな私の姿を見ていてくれました。お姉さんと一緒にやってみようという気持ちで、心を開くきっかけになったのではと思います。

各市町区町村の教育委員会 (社会教育課・生涯学習課)

神奈川県横浜市、川崎市
横須賀市、平塚市、大和市
足柄下郡湯河原町
静岡県静岡市、藤枝市
駿東郡長泉町、田方郡函南町
千葉県佐倉市
新潟県新潟市



**横浜市教育委員会事務局
生涯学習文化財課**
国際日本学部国際文化交流学科
河野 南月

私が横浜市教育委員会で実習をする ことにした決め手は2つあります。1つ目は、これまでの社会教育課程の授業での学びから、子どもをターゲットにした施設で実習をしたいと考えていたからです。2つ目は、公務員の仕事に関心があったからです。以上の2つを同時にできる実習先であったため即決しました。

実習先では主に2つのことを学ばせていただきました。1つ目は、社会教育とは何かということです。これまで社会教育を学んできましたが、それが何かを説明するのができませんでした。しかし、実習期間中に担当の方と社会教育について考える時間をとっていただきました。その中で「社会教育は何かをきっかけに人々が繋がり、困ったときに協力したり助け合ったりするという基盤」だということを教えていただきました。2つ目は、ボランティアへのハードルが下がったことです。これまでボランティアへの参加経験はなかったけれどもこの実習を通して、とても充実した時間を過ごすことができ、今後は積極的に参加したいと思うようになりました。



**藤枝市教育委員会
生涯学習課**
経済学部現代ビジネス学科
永井 智純



出典：横浜市政策経営局データ経営部公式note

実習先に地元の生涯学習センターを志望した理由は、地元についてより理解を深めたいと思ったからである。大学生になってから社会教育を学び始めたため、高校生まで住んでいた地元を、社会教育という視点で地域を見たことがなかった。そのため実習を通して地元ではどのような社会教育が行われているのかを学べるととても良い機会だと感じ志望した。

実習を通して主に以下の2点を学ばせて頂いた。1点目として、志望動機でもあった地元で実際にどのような活動が行われているのかである。子ども向けから高齢者向けの講座まで、どの講座も濃い内容で開かれており、市民の学ぶ機会というものをしっかりと確保していた。2点目は先を見て行動することである。生涯学習講座やわたしの主張などに参加させていただいた際に、職員の方々が常に先のことを考えて行動されていた。これまでは参加者としてイベントや講座に参加したが、今回は企画する側として参加者を満足させるための動きを実際の現場を見て学ぶことができた。



その他 社会教育施設 (公設公営、公設民営、民設民営)



(公財) ハーモニセンター
人間科学部人間科学科
横田 杏

自然体験が子どもにもたらす効果や、子どもとの関わり方を学びたいと思い、実習先を選ばせていただいた。

実習に参加して学んだことは、社会教育体験の意義とサポートの距離感の大切さである。私が参加したキャンプ実習では、乗馬や馬のお世話など、子ども達にとっての新しい体験が多くあった。初めて乗馬をする子ども達の中には、恐怖心から馬に乗ることを躊躇する子もいたが、最終日には自ら馬に乗る姿が見られた。このような子ども達の姿から、初めての体験から得られる楽しさや恐怖心、それに向き合った達成感が、子ども達の思い出や学びとなり、成長に繋がることを実感した。また、子ども自身が試行錯誤する機会を作るためには、必要な場面でサポートをしつつも、適切な距離感で見守る姿勢が大人に求められると気付いた。

実習を通して、学校や家庭では得られない新しい体験を提供し、子どもの成長を後押しする役割として、社会教育の場が重要だと改めて学ぶことができた。

神奈川大学SDG s アワード

(参照) 神奈川大学ホームページ
https://www.kanagawa-u.ac.jp/

神奈川大学では、SDGsに関連した研究・取り組みや、SDGsの課題解決に役立つアイデア等、「学生によるSDGsに関するポスター」のコンテストを2021年度から行っています。社会教育課程の学生も毎年応募し、各賞をいただいています。

2022年度

神奈川大学生協同組合賞



神大ポニープロジェクト

六角橋商店街はコロナで賑わいを失った。3年間イベントを中止。活気が失われていた。そこに、神大生が奮起し、商店街を元気にしたい一心で「ポニープロジェクト」を立ち上げた。商店街に動物を連れてくる交渉は難航し、時間を要した。しかし、当日は1500人の集客。子ども、ファミリー層、カップル、沢山のお客が集まった。店主さんは大喜び。久しぶりの賑わいで笑顔を取り戻した。これからも大学と商店街との絆を大事にしたい。

京セラ賞



ユースフォーラム 町内会グループ

最も身近な地域コミュニティ「町内会」を未来の世代へも。私たちは横浜キャンパスのお隣・斎藤分町南部町内会と協働し「ヒューマンライブラリー」を開催しました。これは地域の方を“本”に見立て、“読者”である学生がその人や地域の物語に耳を傾けるという企画。当日は30名以上が車座になり、人生の図書館で心通うつながりの新たな頁を開きました。今はまだプロローグ。多様な主体が関わる地域づくりの物語は続いています。

横浜銀行賞



かながわユースフォーラム

コロナで人との交流が減り、わたしの大学は元気がなかった。そこで神大生の有志が集まり、地域をフィールドとした若者と地域との交流型事業「かながわユースフォーラム」を企画運営。地域課題を学び、考案、実行の全てを学生が担った。イベント当日は200名の学生が集結。地域の大人との本気の意見交換で、新たなつながりを創出。一方向型から双方向対話型へ学び方が変わる。ローカルな地域は、まるごと、私たちのキャンパスになる。地域活性化はあもしろい。これからもローカルに学びたい。

2023年度

横浜銀行賞



かながわユースフォーラム

若者の「活動をしたい」気持ちを開花させる。地域と学生が繋がる「かながわユースフォーラム」も今年で4年目を迎える。継続している取り組みだからこそ生まれた「えん」や、新たに地域の声を聞くことで「えん」を生み出し、学生が学生に広げていく。そして、この活動を通して得た経験を人を通じて次世代へ伝える事でより豊かな人が住むまちが作られていく。この循環を継続することで、よりよい地域との関わりを追い求めたい。

神奈川大学生協同組合賞



おだわらみかんプロジェクト

私たちおだわらみかんプロジェクトは、学生が主体となり、小田原市内のみかん農家や製菓所と連携し、「廃棄みかん」に焦点を当て、みかんを使った特産品の開発による地域貢献を目的に活動している。学生の斬新なアイデアにより「みかんうどん」を考案。合計で、10箱相当のみかんから6.2kg分の皮を使って600食以上を製造・販売した。多くの人に小田原の抱えるみかんの問題について知ってもらう事ができた。

みんなにとっての社教とは？

4年生に聞きました！

①社教での学んだこと、または頑張ったこと

②自分が変わったと思ったとき ③今後はどう生かす？

山田陽斗 法学部 自治行政学科

S町役場



社教で1番頑張ったことは、かながわユースフォーラムです。一つ一つの作業にミスがないように丁寧にやることで、注意力がついたと思います。1番学びになったことは、川崎市子ども夢パークの西野先生から受けた授業で、不登校児童についてや自分と違った立場の人間について考えるきっかけとなりました。

かながわユースフォーラムを行っている期間で、人前で話すことに苦手意識がなくなりました。具体的なエピソードは特になのですが、かながわユースフォーラムの準備で、仲間の前や外部の方に話す機会など様々な場で自分たちが話す経験ができたため、かながわユースフォーラムを行う前と後で人前で話すことへの苦手意識がなくなりました。

社教で多くの人と関わり、人のことを考える力がつきました。この力を生かして、就職先でも町に貢献していきたいと思います。

中田千唯 人間科学部 人間科学科

K県庁



かながわユースフォーラムの企画運営。チーム内での役割分担やスケジュール管理を徹底することで、スムーズな運営が行えるように心がけていた。自分一人で頑張り過ぎるのではなく、仲間と協力しながら目標を達成する喜びを実感できたと思う。

悩みを友達に打ち明けたことで、一人で抱え込むよりも仲間を頼る大切さに気づけた。これまで効率を優先して一人で行うことが多かったが、社教での経験を通じて協力することの大切さを改めて感じる事ができたと思う。

社教で学んだ仲間と協力する大切さや柔軟に対応する力を、これからの人間関係や仕事で活かしていきたい。

赤堀莉子 経済学部 現代ビジネス学科

K市役所



社会教育実習。実習に参加するまでは将来やりたいことが見つからなかった。

私はこれまで経験したことない非日常環境の実習に参加した。実習を通して地元の市役所にて社会教育を広めていきたい！という思いが強くなり、地元市役所の面接でアピールできたことが内定に繋がったと感じている。面接の際、社会教育で経験したエピソードをたくさん交えて、将来どのような職員になり、まちづくりを行いたいのか、具体的に話すことができた。

人前で自分の意見を言えるようになったとき。社教の授業では自分の意見を発表する場面が多くあり、その場で頭の中で意見を整理することが鍛えられた。これはグループ面接の際に率先して意見を述べる先に非常に生かされた。

春から地元の市役所で働く。ジョブローテーションを通して、社会教育で学んだ地域密着や様々な人と関わった経験を生かし、大好きな地元に貢献していきたいと思う。

根本有彩 国際日本部 歴史民俗学科

U市役所



コミュニケーション力と、相手の立場に立って考えることができる力を伸ばすことができました。子どもから高齢者まで幅広い世代の方との交流を通して、より一層これらの力を伸ばすことができたと感じています。

私は、人前に出て発表することに少し苦手意識がありました。しかしながら、社教の授業ではプレゼンテーションなど人前で発表する機会が多く、苦手ながらも一つひとつ精一杯取り組んできました。そのおかげで、人前に出て発表することに対する抵抗がなくなったように思います。

社会教育課程で培うことができた課題解決力やコミュニケーション力、相手の立場に立って考えることができる柔軟性を生かして、今後公務員として精一杯励みたいです。

伊藤千夏 国際日本学部 歴史民俗学科

レクリエーション施設



企画をつくる等の1つの目標に向けてのチームでの動き方が最も学びになりました。数々のグループワークからチームビルディングについて考えることができるようになりました。

ブレストの方法やアンケート整理の方法等を学んでから、より自分自身の企画力が上がったように思います。実際、個人的にイベントを実施したときもアンケートを整理し振り返る力がイベントの充実度につながっていると感じました。

私の夢は商店街でコミュニティづくりをすることです。そのためにも、社会教育課程で得た学びをイベントの企画や組織づくりにいかしていきたいと思います。第1目標である自分を介して多くの人が地域づくりの面白さを知ってくれることをまずは極めていきたいと思います。

山田優菜 人間科学部 人間科学科

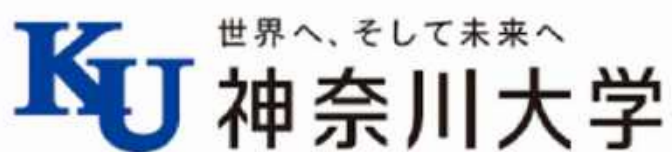
教育関係



かながわユースフォーラムで、同期たちと1から自分たちでワークショップの企画運営をしたこと。学校内外の多くの方と関わりながら規模の大きい学びの場を作る経験は大変学びになった。

周囲の人に話しかけることにためらいが無くなった時。社教履修前はやや引っ込み事案で、自分から進んで周りの人たちに話しかけることが恥ずかしいと思っていた。しかし社教履修後は同じ授業を受ける学生など学校内で関わる人だけでなく、実習先や内定先で関わらせていただく方たちに自然と自分から話しかけたり質問したりなど、はたらきかけができるようになった。

自分から周囲の人にはたらきかけるなど、自然と人の輪をつくることのできるような立ち振る舞いを、今後は仕事で活かしていきたい。「チームにいてくれると仕事がしやすい」人になれるよう、「人と人を繋ぐ」社会教育で学んだことをアウトプットし続けることが目標。



2025年2月発行

発行：神奈川大学社会教育課程 横浜キャンパス
神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1

編集：神奈川大学社会教育課程 齊藤ゆか
地域コーディネーター 益田麻衣子・木下直子

連絡先：神奈川大学社会教育課程 045-481-5661（代）